



2009 年度上期未踏 IT 人材発掘・育成事業 採択案件評価書

1. 担当PM

石黒 浩 PM(大阪大学大学院 基礎工学研究科 システム創成専攻 教授)

2. 採択者氏名

チーフクリエイター: 藤森 一夫(株式会社イーガー 新規事業開発部 社員)
コクリエイター : なし

3. プロジェクト管理組織

オムロンソフトウェア株式会社

4. 委託金支払額

6,457,230 円

5. テーマ名

人識別を用いた広告ロボット用モーションエディタプログラム開発

6. 関連Webサイト

なし

7. テーマ概要

■概要・目的

従来の広告において、不特定多数に対し一方的な商品宣伝を行う手段が大方を占めている。例えば、折り込みチラシや街頭に掲示されているポスター等がその一例である。

この場合、女性に対し、女性が余り有益としない宣伝(髭剃りシェーバー等)を行ったとしても余り効果が見込めない。また、近年では不必要な情報が溢れ、いわゆる情報洪水が発生している。

こうした状況を改善する為、人識別機能やセンサなどRT(ロボットテクノロジー)を用い、その人に対し効果的な広告方法を考える必要がある。

本プロジェクトではこのような人識別機能を用い、最適な製品を宣伝する効果的な広告活動を行うロボットを、ロボットに精通しない人でも簡単な操作で、広告を行うロボットを制御できる広告ロボット用モーションエディタプログラムを開発する。

■ 成果物

ロボットに精通していない人が簡単に操作できる広告ロボット用モーションエディタプログラム。

- ① 人の固有識別を行い、その人に最適な商品を選択し、動きなどを付加した宣伝を可能にする。
- ② 蓄積された商品データベースからの抽出を行う。
- ③ 広告の内容に拠ったロボットの動きを実現する。
- ④ 映像と同期した動きを可能にするデータフォーマットにて実行する。
- ⑤ 素人でも扱いが容易なインターフェースを実現する。
- ⑥ ロボット専用制御コマンドへの変換を可能にする。

■ 将来性

本提案の実現化により、各店舗において、お客の特徴を捉えた訴求力の高い広告“ロボットアドバタイジング”を行う事で販売促進が期待できる。ターゲットは店舗関係者などである。特にロボットに精通していない人でも容易に扱える事により、ロボットを用いた広告市場が創生できると考えられる。

8. 採択理由

現在のロボット技術に見合った目的とソフトウェア開発である。ロボットの普及促進においても期待できる。

9. 開発目標

- 1) 「ロボットシステム」では、人識別処理・広告コンテンツ再生・ロボットの動作・全体制御を担うロボット自身に搭載するソフトウェア及びシステムを開発する。特に、より正確に人識別(年齢、性別)を行い、その属性に合わせた広告を選択できるもの

にする。

- 2) 「モーションエディタプログラム」は、ユーザがより簡単に広告内容や動作をカスタマイズできるようにするため、広告のビジュアル/音声の再生機能・ロボットの動作をマウス操作で編集できるようにする。

10. 進捗概要

本プロジェクトは、ソフトウェアの開発、ハードウェアとの連携、実証実験など、ほぼ計画通りに推移した。途中、広告内容のストーリーやセリフ、ロボットの動作に関する指摘を挙げたが、比較的速やかに修正対応することができていた。

11. 成果

当初計画の通りの広告ロボットシステムと、モーションエディタプログラムが完成し、以下のような成果を実現できた。

- ・ロボットが人識別を行ない、その人にあった訴求商品を選択し、より細やかな広告コンテンツを提供する。
- ・ロボットがテンポよく動き、音楽や画像に合わせたインパクトのある販促を行う「動く広告メディア」となる。
- ・広告主(ユーザ)が、PC上で簡単に、広告内容やロボットの動作をカスタマイズできる。

12. プロジェクト評価

本プロジェクトでは、既存の人間型ロボット(車輪移動)を用いて、商品の宣伝を行わせるための支援ソフトウェアを開発した。

ロボットは数多く開発されているが、その問題は、特定の開発者にしか扱えないことである。誰もが簡単にロボットを利用できるようにするには、そのための支援ソフトウェアが必要である。本プロジェクトでは商品の宣伝に焦点を絞り、誰もが簡単に商品宣伝用のソフトを開発できるようにした。

クリエイターは企業に所属しており、企業からも応援してもらったこともあり、ソフトウェアの完成度は、機能とインターフェースの両方において完成度が高い。

今後、画面デザインに手を加えて、一般にも販売・普及させていく予定である。

今後の課題としては、異なる形状へのロボットの対応等、幾つか残されているが、特定のロボットである程度の成功を収めれば、異なるロボットに順次対応していくことは難しくないと考えられる。

パソコンがそのソフトウェアの魅力で普及したように、ロボットにおいても誰もが使えるソフトウェア環境があって始めて普及する。その意味で、本プロジェクトは、ロボットの普及という意味でも、意義深い取り組みであったと考える。

13. 今後の課題

他のロボットへの対応と、ソフトウェア画面のデザイン改良。